談話室

韓国の省エネルギー物語

Energy Conservation in Korea

孔　　他　　光*
Kong, Ta-Gwang

日本と韓国の関係をシンボル的に言い現わした言葉に「近くて遠い国」というのがあります．この言葉は，エネルギー資源分野の協力関係にもあてはまるものと思われます．それほどまでにお互いに協力できる課題が長らくの間欠落していたことを物語ると言えましょう．もともと資源が乏しいだけに日本と韓国はそれぞれ隣りの国にたいしてはあまり関心を寄せることなく，遠くの資源国または先進諸国のみを相手にしてきた結果ではなかろうかと思われます．

1992年6月，リオデジャネイロで開かれた「地球サミット」以降，世界の国々はエネルギー資源のサステインナビリティーに懸念を抱き，隣国のエネルギー環境にも次第に目を向けるようになりました．

今，韓国におけるエネルギー部門の問題点と課題をみますと，まず第一にエネルギー需給の構造的な不安定性があげられます．1988年のソウル・オリンピック以降，経済成長を上回るエネルギー消費は，政府の多方面にわたる省エネルギー努力にもかかわらず，その翌年から1993年にわたって引き続き6年間1ケタのエネルギー消費の所得弾性値を記録しましたが，1994年に入って弾性値が1未満となりました．エナーゼティクな成長の裏では国外からのエネルギー輸入を一層増大させることになって，その海外依存度が1990年の87.9%から1994年には96.4%まで上がり，いわゆるエネルギー・セキュリティの低下を招きました．第二は，国際社会の大きなトレンドとも言えますが，地球環境の制約をクリアーするための省エネルギーおよびそれにともなう環境負荷の減少をどう推し進めるべきかということです．

本欄でもすでに数回にわたって省エネルギー問題を取り上げましたが，筆者のような外国人としては省エネルギーという言葉を誰がつくり，誰が最初に使ったかは解らないのですが，特にハングル（韓国語）には「省エネルギー」を正確に表す言葉や単語はないから筆者の短い日本語体験に基づき，「省エネルギー」の言葉について物語れといえば，「省エネルギー」という言葉は，いかにも日本語的に意味が漠然としているが，もともと省エネルギー自体があまりはっきりしたコンセプトではなく，必要なものをけちるのは省ではあり得ないし，むしろ無駄を省いて，必要なところへ省いた分をもっていくという考え方を意味していると言えましょう．そして「省エネルギー」はエネルギーを節約するという意味から効率的利用といった技術改良の観点，あるいは産業構造，経済や社会システムを変えることによってエネルギー消費を抑えるというようなマクロ的な意味までも含んでいるとても便利な言葉ではないかと思います．以上のように省エネルギーという言葉はたいへん曖昧な使われ方をしているのですが，最も狭く定義すれば固有の技術を与件として，その投入エネルギーを減少させることであり，最も広義にはGNPあたりのエネルギー消費量の減少という定義が考えられます．国民経済という立場からみればこの最も広義の定義の方が所得が向上した場合にもエネルギー消費量を抑制することができるかどうかという意味で最も妥当な定義となるでしょうが，韓国の経験によればエネルギー利用効率化（エネルギー消費のGNP原単位改善）はそれほど容易なことではないのです．一般的に省エネルギーを「サービスの提供水準を低下させずにエネルギー消費量を低減させる方策」だという次元の定義とは別に「我慢」によるエネルギー消費の減少という考え方もあり得ます．エネルギーは本質的に不可逆であり，「再生不能」であるので完全な意味でのリニューアブルなエネルギーというのが存在しないと同様，完全な意味でクリーンなエネルギーというのはないかもしれません．筆者のみるところでは少なくとも省エネルギーほどはすぐれたクリーン・エネルギーではないかと思われます．

いわゆる世界経済の機関車とも呼ばれるエイペック（APEC）グループのアジアNIESの一員である韓国は，先述の通り経済成長にともなうエネルギー・セキュリティの低下を抑止する一方で，環境とのハーモナイ

*韓国エネルギー管理公団（The Korea Energy Management Corporation）総務部人事次長
住所・韓国ソウル特別市瑞草区瑞草三洞1467-3

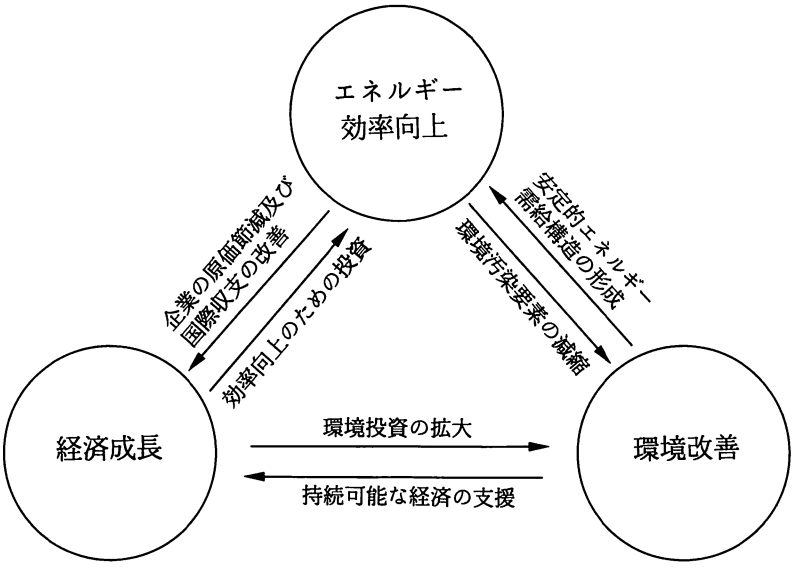

図　グリーン・エナージー・ファミリー運動のあらまし

ゼーションを計るためいわば3 Es（Economy, Energy, Environment）という調和的な三位一体（TRINITY）の問題解決の方法の一つとして，省エネルギーに着目し，1995年から3 Esにたいするチャレンジ・プログラムとして「グリーン・エナージー・ファミリー運動」と名付けられているプロジェクトを筆者の所属している韓国エネルギー管理公団では実行に移しております．このプロジェクトのスキームは一般のトリレンマの構造と同じですが，要約すると図示の通りです．同プロジェクトの初期階段では国内向けの働きに過ぎないであろうと見なされましたが，近い将来，オープンしなければならないと思います．図に示すように，「経済成長」と「エネルギー効率向上」と「環境改善」の3者はからみ合った複雑な因果の連鎖で結ばれているが，この「トリレンマ」を取り組むため，我々公団では技術をてこ（レバー）にして，エネルギー効率の向上をそのトップ・プライオリティに位置づけ，民・官の創意と活力ならびに英知を結集していくことになりましょう．これからも，日本の関係諸機関各位皆様方の御関心・御指導をお願い申し上げます．